

指導の手引き

人とのかかわりを豊かにする 教育の推進

— 幼児が「協同する経験」を重ねるための教師の援助 —



兵庫県教育委員会

はじめに

近年、子どもの育ちについて、基本的な生活習慣の欠如、コミュニケーション能力の不足、自制心や規範意識の不足等が指摘され、この背景として、少子化、核家族化等の進行による人間関係や地域社会における地縁的なつながりの希薄化等により、家庭や地域社会の教育力が低下していることが考えられています。このため、今後、幼稚園には、幼児の発達や学びの連続性を踏まえた教育を充実させていく役割、並びに、家庭や地域社会の教育力を補完・再生・向上させていく役割が求められています。

こうした中、平成18年に改正された教育基本法では、第11条に「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と規定され、また、その翌年改正された学校教育法では、「幼稚園教育が義務教育及びその後の教育の基礎を培うもの」として、幼稚園が学校教育のスタートとしてその重要性が位置づけられたところです。さらに、これらの法改正等を踏まえ、平成20年3月28日には、10年ぶりに幼稚園教育要領が改訂され、他校種に先駆け、平成21年4月より全面実施となっています。

今回の幼稚園教育要領では、幼稚園教育の基本的な考えである「環境を通して行う教育」を引き継ぎつつ、発達や学びの連続性及び幼稚園での生活と家庭などでの生活の連続性の確保、子育ての支援や預かり保育といった幼稚園機能の充実が、主な改訂内容として示されました。

また、実際の教育活動においては、家庭や地域において、幼児が「人とかかわる力」を身に付けていく機会が失われつつある現状を踏まえ、幼児が初めて経験する集団生活の場である幼稚園において「協同する経験」を重ねていくことの重要性が新たに示されました。このことから、遊びを通して幼児同士が折り合いを付けること、充実感や達成感、時には挫折感等様々な感情体験をすることなど、多様な経験を通して人とかかわる力の基礎をはぐくむことが求められています。

そこで、今年度、県教育委員会では、幼稚園教育課程実践推進事業を実施し、幼稚園教育要領の趣旨を踏まえた教育を充実させるため、特に幼児の「協同する経験」をテーマに、県内に研究協力園を設け、「発達の過程に即した協同する経験の様相」「協同する経験が深まっていくための教師の援助・環境の構成」「PDCAサイクルに基づく園内研究体制」の観点から実践研究に取り組むとともに、幼児教育支援委員会を設置し、研究協力園の取組をもとに、幼児が「協同する経験」を重ね、人とのかかわりを豊かにする教育の在り方等について検討を重ね、ここに指導の手引きとしてまとめました。

今後、各園におかれまして、本書を参考として、幼稚園教育要領の趣旨を踏まえた特色ある教育課程の編成や幼児が人とのかかわりを豊かにする保育実践を展開され、本県の幼児教育が一層充実することを期待しています。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご協力をいただいた幼児教育支援委員会委員及び各研究協力園の皆様に深く感謝申し上げます。

平成22（2010）年2月

兵庫県教育委員会

も く じ

I 幼児教育の推進にあたって

- 1 幼児教育の重要性 1
- 2 発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の推進

II 人とかかわる力と協同する経験

- 1 人とかかわる力の育成 2
- 2 「協同する経験」の教育的意義
- 3 「協同する経験」と教師の援助

III 協同する経験をとらえる共通課題と視点

- 1 「協同する経験」をとらえる共通課題と視点 3
- 2 共通課題に即した実践事例の特徴 4

IV 協同する経験を深めるための援助の実際

共通課題 1 発達の過程に即した協同する経験の様相

- ・ 事例 1 [Ⅰ 初めての集団生活の中で、様々な環境に出会い試す時期] 「土山で穴掘り」 6
- ・ 事例 2 [Ⅱ 遊びが充実し、自己表現を楽しむ時期] 「フープでジャンケン遊び」 8
- ・ 事例 3 [Ⅲ 人間関係が深まり、学び合いが可能となる時期] 「ドングリ拾い」 10

共通課題 2 協同する経験が深まっていくための教師の援助・環境の構成

- ・ 事例 4 [視点 A：遊びを工夫する力] 「忍者の修業の森で遊ぼう」 12
- ・ 事例 5 [視点 B：ルールをつくりだし守って遊ぶ力] 「スケーター遊び」 14
- ・ 事例 6 [視点 C：言葉による伝え合う力] 「リレーごっこ」 16

共通課題 3 P D C A サイクルに基づく園内研究体制

- ・ 事例 7 「公開保育の定例化」 3 年保育実施園 18
- ・ 事例 8 「幼児理解を基盤とした園内研究」 2 年保育実施園 20
- ・ 事例 9 「毎日が園内研究」 1 年保育実施園 22

V 協同する経験を重視した教育の充実にむけて

- 実践研究から得られた成果 24
- 人とかかわる力と協同する経験の関連性 25
- 視点からとらえた幼児の姿と協同性をはぐくむ教師の援助の関連表 26

Ⅰ 幼児教育の推進にあたって

1 幼児教育の重要性

今後の幼稚園教育の推進にあたっては、幼児教育における初めての中央教育審議会答申である「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（平成17年1月28日）」において、次の2点が方向性として示されました。

- ①家庭・地域社会・幼稚園等施設の三者による総合的な幼児教育の推進
- ②幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実

この答申の内容を踏まえ、教育基本法などの法改正や、幼稚園教育要領（平成20年3月）の改訂が行われました。今回の改訂では「生きる力」を育成する理念は継承しながら、特に次の点が改訂のポイントとして示されました。

- ①発達や学びの連続性を踏まえた幼稚園教育の充実
- ②幼稚園生活と家庭生活の連続性を踏まえた幼稚園教育の充実
- ③子育ての支援と預かり保育の充実

また、これより先、国においては、平成18年10月「幼児教育振興アクションプログラム」が策定され、平成22年度までの5年間に「幼稚園・保育所の連携と認定こども園制度の活用の促進」「発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」「教員の資質及び専門性の向上」等、就学前教育の充実に向けて各地方公共団体において取り組むことが望まれる内容が示されました。

こうしたことから、今後の幼児教育の推進にあたっては、幼稚園、保育所、認定こども園等、幼児を預かる施設が、「幼児の最善の利益のために、幼児の視点に立って幼児教育の将来を考えていく」を理念に、幼児教育を充実させていくことが大切であり、幼稚園においては、園長のリーダーシップのもと、幼稚園教育要領の改訂内容と各園の実態を踏まえた特色ある教育課程を編成し、幼稚園教育を推進していくことが重要となっています。

2 発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の推進

幼稚園教育要領では、幼稚園修了までに幼児に育つことが期待される心情・意欲・態度などを「ねらい」として示し、その「ねらい」を達成するために幼児が経験し、教師が指導する事項を「内容」として示しています。この「ねらい」と「内容」を、幼児の発達の側面から「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域にまとめ、15の「ねらい」と52の「内容」で示しています。特に、今回の改訂では、近年の子どもの育ちの変化に対応するため、「発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」が一層重視されています。

すなわち幼児は、主体的に遊びに取り組む中で、自己表出、自己表現、自己発揮を繰り返し、自分以外の「もの」や「こと」に気付き、関心を広げ、様々な思考を巡らし、知識を蓄えるための基礎を形成していきます。

また、そのかわりの中で、他者に気付き、他者を理解するようになり、「人とのかわり」を広げていきます。さらには、このような生活を基盤として、その後の学校全体の生活や学習の基盤を培っていきます。このように幼児の生活及び発達を連続性のあるものとしてとらえ、その時期の幼児の興味、関心や学びがどのようなものであるのかということを踏まえ、一人一人に応じた指導をしていくことが大切です。

この「発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育」を推進していくためには、幼稚園教育の特性である幼児の主体的な活動としての遊びを十分確保するとともに、幼児の発達する姿を的確にとらえ、その時期に応じた生活が展開できるように幼児理解に基づいた計画的、組織的な教師の援助が重要となります。

II 人とかかわる力と協同する経験

1 人とかかわる力の育成

今回の幼稚園教育要領では、その大きな改訂点のひとつとして、領域「人間関係」のねらい「身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ」において、「人とのかかわりを深める」という内容が新たに加わり、自己から他者への世界へ視野を広げる幼児期に、様々な体験を通して「人とかかわる力」を育成していくことが重要となっています。

しかし、現実には家庭や地域社会において幼児同士で遊び、葛藤しながら成長する体験の機会や安心して遊べる場の減少等、幼児が成長過程で「人とかかわる力」を自然に身に付けていく機会が失われつつあります。このため、幼児にとって初めての社会生活の場である幼稚園において、友達と楽しく活動する中で共通の目的を見だし、工夫したり協力したりする「協同する経験」を重ねていくことが大切となっています。

2 「協同する経験」の教育的意義

幼稚園教育要領において「協同する経験」については、領域「人間関係」の内容（8）「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする」及び、内容の取扱い（3）「幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」と示されています。

本書においては、「協同する経験」を次のようにとらえ、生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児期にこそ、「協同する経験」を通して、友達が好きになる、友達と仲間になる、友達と育ち合うという経験を重ねていくことが重要と考えています。

- 友達とともに遊びを進める中で、自分の考えを表現し、相手との考えの違いに気付いたり、トラブルや意見交換を通して相手の考えを理解するようになったりするなど、幼児同士が「折り合いを付けていく経験」を通して、「様々な感情体験」を重ね、人とのかかわりを広げ、深めていくこと。
- また、このような人とのかかわりを通して、よいことや悪いことに気づき、考えながら行動したり、きまりの大切さに気づき、守ろうとしたりするなど、生活のために必要な習慣や態度を身に付けていくこと。

3 「協同する経験」と教師の援助

「協同する経験」を通して、幼児は自分の思いを伝え合い、話し合い、新しいアイデアを生みだしたり、自分の役割を考えて行動したりするなど、力を合わせて協力するようになります。

また、みんなで一緒に活動する中では、自分の思いと友達の思いが異なることもあり、時には自己主張がぶつかり合い、ある部分は友達の思いを受け入れたりしながら活動を展開していくことに気付いていきます。

このように、幼児同士が試行錯誤しながら活動を展開していく場面において大事なことは、幼児自身が活動自体を楽しむことであり、また、幼児が何を楽しんでいるのか一人一人の思いに沿いながら、幼児自身が十分に活動を楽しむための教師の援助が大切となります。

幼児にとって、遊びの共通の目的は実現したり実現しなかったりしますが、実現しなかった場合でも、幼児が活動そのものを楽しんでいれば、またみんなで一緒に活動しようという気持ちになります。また、共通の目的が実現した場合、その喜びを十分に味わうことが次の活動につながっていくと思われれます。

そのために教師は、「協同する経験」がはぐくまれる過程（プロセス）を大切にするとともに、幼児の「協同する経験」を見取る確かな視点や幼児理解をもつことや「協同する経験」につながっていくための意図的な援助の工夫等、教師自身の「協同する経験」に対する理解を図っていくことが大切です。

Ⅲ 協同する経験をとらえる共通課題と視点

1 「協同する経験」をとらえる共通課題と視点

「人とかがわる力」の育成が重要であること、そのためには「協同する経験」が必要であることはすでに記述したところですが、本県が今年度実施した幼稚園教育課程実践推進事業では、各研究協力園で展開される実践研究の成果をより豊かなものにするため、共通の課題を定めておく必要があると考えました。

そこで、まず、「協同する経験」と幼児の育ちの関係性の理解、「協同する経験」を深めるための援助の在り方、「協同する経験」を研究していく仕組みの構成が重要であると考え、それらを以下に示すような共通課題としました。

【研究を進めるための共通課題】

- 1 発達の過程に即した協同する経験の様相
- 2 協同する経験が深まっていくための教師の援助・環境の構成
- 3 PDCAサイクルに基づく園内研究体制

また、幼児の「協同する経験」を理解し、適切な援助を行うためには、様々な場面で幼児が示す姿の中から、その内面も含めた「協同」的な要素を教師自らの援助ともかかわらせながら見取っていく視点が必要です。このような視点は、教師一人一人が、幼児の発達や学びの姿を真摯に見極め・語り合うことを通して、幼児理解のための枠組みを共有していこうとする態度によってより確かなものになると思われます。

そこで、本書では、近年の子どもの育ちの変化に対応すべく、幼稚園教育の目標（学校教育法第23条）に新たに加えられた内容、すなわち「思考力の芽生えを養うこと」「規範意識の芽生えを養うこと」「言葉による伝え合いを重視すること」に着目し、「協同する経験」を見取る視点を以下のように設定しました。

これら3視点は、具体的な援助に最も関係する共通課題2「協同する経験が深まっていくための教師の援助・環境の構成」に導入することにしました。

なお、これらの視点を設定した理由は、視点の中に含まれているそれぞれの「力」が「協同する経験」によって幼児に培われるものであると予測されるからです。

【教師の援助・環境の構成のための視点】

- 〔視点A〕 遊びを工夫する力はどうにはぐくまれていくか
- 〔視点B〕 ルールをつくりだし守って遊ぶ力はどうにはぐくまれていくか
- 〔視点C〕 言葉による伝え合う力はどうにはぐくまれていくか



2 共通課題に即した実践事例の特徴

本書では、先に示した共通課題1～3についての具体的な実践事例を6頁以降に、Ⅳ「協同する経験を深めるための援助の実際」として掲載しています。

実践事例の構成

- **共通課題1「発達の過程に即した協同する経験の様相」**では、幼児の発達の過程を、次の3つの時期としてとらえて、幼児の育ちに基づいた教師の援助がいかに大切であることを示しています。これらの発達の時期は、3歳児、4歳児、5歳児の時期としてとらえるだけでなく、どの学年においても同様に発達する姿をとらえることが必要です。なお、実践事例は5歳児の事例を掲載しています。

I 初めての集団生活の中で、様々な環境に出会い試す時期（居場所・好きな遊び）

ここでは、教師との信頼関係のもと、幼児自身が自己安定を図り、好きな遊びを通して自己表出する時期ととらえています。



事例1

「土山で穴掘り」 P.6

II 遊びが充実し、自己表現を楽しむ時期（やりたい遊び）

ここでは、幼児自身がやりたい遊びに取り組み、自発性を発揮しながら友達や周囲の環境にかかわり、自己主張することと自己抑制することを体得していく時期ととらえています。「協同する経験」を重ねていく過程の中でも、幼児が様々な感情体験をする重要な時期ととらえています。



事例2

「フープでジャンケン遊び」
P.8

III 人間関係が深まり、学び合いが可能となる時期（協同的な遊び）

ここでは、それぞれの幼児が今までの経験を生かし自己発揮して遊びを展開していく時期、また、友達と共通の目的をもって遊びを展開していく時期ととらえています。



事例3

「ドングリ拾い」 P.10



○ **共通課題2「協同する経験が深まっていくための教師の援助・環境の構成」**では、幼児同士が共通の目的・イメージをもって遊びに取り組んでいる姿を、P3で示した幼児の姿を見取る〔視点A〕遊びを工夫する力、〔視点B〕ルールをつくりだし守って遊ぶ力、〔視点C〕言葉による伝え合う力からとらえ、より遊びが広がり深まっていくための教師の援助を具体的に示しています。

視点Aでは、幼児が友達と一緒に試行錯誤する姿や考えをだし合う姿等をはぐくむための教師の援助の在り方



事例4
「忍者の修業の森で遊ぼう」
P.12

視点Bでは、幼児がトラブルを通し、自分の思いや考えをだし合い、ルールをつくりだし守って遊ぶことの必要性に気付くための教師の援助の在り方



事例5
「スケーター遊び」
P. 14

視点Cでは、幼児が思いを伝え合いながら遊びを進めていくための教師の援助の在り方



事例6
「リレーごっこ」 P. 16



○ **共通課題3「PDCAサイクルに基づく園内研究体制」**では、幼児が「協同する経験」を重ねていくために教職員の共通理解のもと、組織的な園内の研究体制を構築し、保育の検証・改善を図る園内研究の工夫を3年保育、2年保育、1年保育等、園の実態に応じて事例を紹介しています。ここでは、保育の検証・改善サイクルを確立するためPlanは「計画」、Doは「実践」、Checkは「自己評価（保育の検証）」、Actionは「次への反映（改善内容）」とし、3事例を紹介しています。

事例7 「公開保育の定例化」（3年保育実施園） P. 18

事例8 「幼児理解を基盤とした園内研究」（2年保育実施園） P. 20

事例9 「毎日が園内研究」（1年保育実施園） P. 22

Ⅳ 協同する経験を深めるための援助の実際

「人とのかかわり」を視点として、幼児の育ちを三つの時期でとらえています。

- Ⅰ 初めての集団生活の中で、様々な環境に出会い試す時期（居場所・好きな遊び）
- Ⅱ 遊びが充実し、自己表現を楽しむ時期（やりたい遊び）
- Ⅲ 人間関係が深まり、学び合いが可能となる時期（協同的な遊び）

共通課題 7 発達の過程に即した協同する経験の様相

事例 1 「土山で穴掘り」

－ 1年保育 5歳児 5月－

Ⅰ 初めての集団生活の中で、様々な環境に出会い試す時期（居場所・好きな遊び）

この時期は、幼児が初めての集団生活の中で、様々な環境（ひと・もの・こと）に出会い、興味をもったことをいろいろ試す中で、安定する居場所を見付けていきます。幼児は、この居場所を基盤に、「自分からやってみる」「自分のことは自分でする」「みんなと一緒にする」等、集団の中で自発性が芽生えてくる時期です。

「協同する経験」をはぐくんでいくために、この時期には、一人一人の幼児が安定する、自己を表出するという経験を重ね、ありのままの姿が出せる、自分の考えや思いがもてるようにしていくことが大切です。

本事例1「土山で穴掘り」では、友達の遊びを傍観していることが多く、なかなか遊びに入っていけないA児に教師が寄り添い、心の安定を図りながら、自ら動き出そうとする姿を通して、この時期に必要な教師の援助について考えます。

ねらい

- 自分の好きな遊びを見つけて友達と一緒に楽しむ。
- スコップを使い友達と穴を掘ることを楽しむ。

幼児の姿

- A児は土山付近をうろうろしながら、友達の遊びを傍観している。
- 教師「A君はどんなことがしたいかな？」A児「今、考え中」A児：他児の行動をじっと見ている。
- ①教師「A君もお山を掘ってみる？」と再度声を掛けて誘ってみる。するとA児が興味を示し、自分から砂場用スコップを取り出し掘り始める。
- 傍で友達を傍観しているB児も「私も穴掘りしてもいい？」と声を掛けてくる。A児が返事をしないので教師が、②「いいよ！A君と一緒に掘ろう。」と答える。B児はA児と向かい合い、穴を掘り始める。
- ③土が重いので二人は、スコップを重ね、一緒に土を二人で持ち上げる。B児「やったね。A君もっと掘ろう！」A児「うん」A児もうれしそうな表情を見せて笑う。



教師の援助・環境の構成

- 遊びを見付けにくい幼児が少しでも興味もてるように、教師も参加し、楽しくなるような場づくりをする。
- 新しい環境や状況になると遊びに入りきれない幼児の内面を読み取り、無理に誘うのではなく、幼児がやりたくなった時にいつでも遊びに入れるような言葉掛けをする。
- A児とB児が互いの存在に気付いてかかわれるように、それぞれの思いを受けとめ、その思いを教師が代弁するなどして互いの気持ちをつなぎ、二人と一緒に遊べるように援助する。

事例を分析する

発達の側面からとらえた幼児の育ち

- ① A児の様子を見ながら、再度声を掛けて誘ってみると、A児がようやく興味を示してきて自分から砂場用スコップを取り出し、土山で穴を掘り始める。
- ② B児とA児は、初めて土山という同じ場で、向かい合い、穴掘りという共通の遊びを楽しんでいる。教師のかかわりが二人をつなげ、B児もA児も一緒に遊ぶことを喜んでいる。
- ③ 重い土を二人で力を合わせて持ち上げることができうれしい気持ちを体感している。

教師の読み取り

- 教師がA児の様子を見守り、状況に応じて声を掛けていたことが「一度やってみようかな」「自分も遊べるかもしれない」とA児の心が動くきっかけとなっている。「いつでも傍にいるよ」「A君を見ているよ」という教師のかかわりが、A児の心の安定につながったと思われる。
- それぞれの幼児の思いを教師が代弁しながらかかわったことが、二人を結びつけるきっかけとなっている。A児、B児ともに、相手の存在に気付き、一緒に遊ぶ相手が見付かり言葉には出さないが「うれしい」という思いが表情やしぐさから窺える。

- 土が重かったので一人で持ち上げることができず、傍にいた二人と一緒に持ち上げるようになった。「土が重いこと」「一人ではできないこと」と出合ったことが、二人で一緒にしようという状況を生みだしている。A児、B児とも、一緒に力を合わせることで、大きな穴を掘ることができ、お互いに「できたね」「よかったね」「楽しいね」という思いを共有している。このように一緒にして楽しい経験は、また、友達と一緒にしてみたいという気持ちにつながる。「一緒にして楽しかった」という感情の積み重ねが、「協同する経験」につながるベースになるとと思われる。

実践から明らかになったこと

- * この時期の幼児は、教師とのかかわりを基盤にして安心感をもつと、自分からやってみようとする気持ちが生まれ、安定して遊べるようになる。
- * このように、幼児自身が、自分から動き出すのをじっくりと待ったり、教師が遊びの場を共有しながら、遊びの楽しさを伝えたりすることが大切である。
そのためにも、幼児が何に興味・関心を寄せているのか、幼児理解を図ることが重要である。
- * また、この時期には、幼児が一人でじっくりと遊びに取り組める時間や場を確保するとともに、幼児が周囲の友達の存在に気付き、友達と一緒に遊びを展開する楽しさが味わえるように、幼児同士をつなぐ援助を意図的に仕組んでいくことが大切である。



ひとことアドバイス

5歳児でも初めての環境になじむことはなかなか難しいことです。

そのとき、友達と一緒に活動することで、気持ちがつながります。そして、言葉もつながっていくのです。

幼児同士のコミュニケーションの始まりを教師が素早く察知することが大切です。

ここがポイント

- ★ この時期には、幼児一人一人の安定した居場所づくりと、友達が意識できるような教師の援助が大切です！

II 遊びが充実し、自己表現を楽しむ時期（やりたい遊び）

この時期は、幼児が幼稚園に慣れ、友達とともに環境の中にある様々な環境（ひと・もの・こと）を介してやりとりをし、何かおもしろいものを作ったり、活動を進めたりして、自分がやりたいことをはっきりともち、その実現のために工夫するようになる時期です。

また、幼児は、好きな友達と一緒に遊ぶ中で相手の思いや考えに気付き、共感したり、時には葛藤したりしながら、「自己主張」すること、「自己抑制」することなど、相手と折り合いを付ける経験を重ねていく重要な時期です。

「協同する経験」を重ねるために、この時期には、幼児自身が様々な感情体験をすること、友達とのやりとりを通して十分に自己表現する経験を重ねていくことが大切です。

本事例2「フープでジャンケン遊び」では、それぞれの考えを主張し合う3年保育5歳児4月の姿を通して、幼児が相手の思いに気付き、自分の思いを調整するようになるための教師の援助について考えます。

ねらい

- 友達と一緒に体を動かす遊びの楽しさを味わったり、楽しく遊ぶ方法を考え合ったりする。

幼児の姿

- 数人の幼児がフープを並べ、両端の陣地から一人ずつスタートし、出会ったところでジャンケンし、勝ったら敵の陣地に進み、負けたら自分の陣地に戻るというルールで遊び始める。遊びが白熱してくると、負けてもスタートの所に戻らなかったり、自分のチームが負けるのが嫌でどんどん前に進み、みんながひっついて連なった状態でジャンケンしたりするなどルールが曖昧になってくる。
- 突然A児が「そんなん、おもしろくないわ、ひつつきすぎや。楽しくない、あかんわ」と大きな声で叫んでいる。しかし、一緒に遊んでいる他児はA児の言葉を気にせず遊んでいる。
- ①教師が「A君が楽しくないと言っているよ、どうしてかな」と声を掛ける。
- しばらく考えてから、B児が「ほんまや、あかんわ、スタートの所へ戻ろう」とスタートに戻る。B児の様子を見て他児も気付き、スタートに戻って遊びを続ける。
- 「A君、みんなが気付いてくれてよかったね」と教師が声を掛けると、A児「B君が、あかんわって言うてくれてよかった」と笑顔で答える。
- しばらくして、A児たちが遊んでいる所に、3歳児がやって来て、並べているフープを違う場所に置いたり、スタートする順番も関係なしでフープの上を走ったりし始める。
- A児たちは怒ることなく「フープ、置いとってな。やりたかったら、ジャンケンしたらええねんで」と優しく声を掛けているが、ジャンケンを理解していない3歳児は時間がかかる。
- それをがまんできなくなったC児が「そんなんしとったらおもしろくないわ。3歳の子、後出しや、ずるい」と一人怒っている。他児に聞き入れてもらえないC児は不満いっぱいである。
- ②片付けの後、クラスで話し合いの場をつくる。
C児「3歳の子、後出ししていた。ずるい」教師「みんなは、どう思うのかな」「3歳やからええ」「3歳の子はジャンケンがまだ分かっていないから、仕方ないで」「勝ち負けなしにして、次の人がジャンケンすることにしたらどう?」と自分たちでルールを決める。「ほんまや、それがいい」と新しいルールができる。教師「Cちゃんは、どう?」と尋ねるとC児「分かった。ぼくもそれやったらいい」と納得する。



教師の援助・環境の構成

- 「ルールを守っていないからおもしろくない」というA児の気付きを全体に広めていくことで、ルールを守って遊ぶ楽しさに気付かせていく。
- 友達に自分の思いを分かってもらえたA児のうれしい気持ちに共感する。
- C児の不満いっぱいである思いを受け止め、C児の気持ちや周囲の幼児の気持ち互いに分かり合えるように、クラスみんなで話し合いの場をもつ。

事例を分析する

発達の側面からとらえた幼児の育ち

- ① A児は、「ルールを守っていないから、おもしろくない」と、友達に伝えているが、周りの幼児たちは遊びに夢中でA児の言葉に気付いていない。教師の言葉掛けで、B児はA児の言うとおりだと気づき、再びルールを守って遊び始める。そのB児の行動に刺激を受け、他児もルールを守って遊びだす。
- ② A児たちは、自分の思いのままに行動する3歳児を自然に受け入れている。しかし、C児は3歳児の行動を受け入れることができず感情をぶつけている。また、周りの幼児にその思いを伝えているが、聞いてもらえなくて不満いっぱいである。みんなで話し合っていく中で、楽しく遊ぶ方法を探っている。友達の意見を聞きながら、C児も「それならいい」と自分の気持ちを落ち着かせている。

教師の読み取り

- 教師は、A児の気づきがルールを守って遊ぶきっかけになると思ったので、みんなに聞こえるように声を掛けた。その教師の言葉掛けで、A児の思いに気付いたB児が、ルールを守らないで遊んでいる自分たちの姿を改め、ルールを守ろうと同意して行動に移している。この時期、遊びに夢中になると、ルールを気にせず遊んでしまうことも多いが、誰かがそのことをだめだと言うと、「そうだな」と納得できる幼児同士の関係が築けている。

A児は、B児が自分の気持ちを分かってくれたことで、みんなに言ってよかったという充実した気持ちになっている。

- A児たちは、3歳児は「自分たちより小さい」「分からないことがいっぱいある」ということを今までの幼稚園の生活経験から理解し、自然に受け入れようとする思いやりや優しさが育ってきている。しかし、C児は「3歳児だから」ということでは納得ができず、ジレンマを感じている。遊びの中では不満いっぱいのC児であったが、話し合いの場で、自分の思いを主張できたことや、友達の意見を聞きながら、自分の気持ちを調整し、新しいルールならいいと折り合いを付けようとしている。

このように、幼児が気持ちを整理し、納得して自分なりの考えをもつことができるような経験を重ねていくことが、友達と協同して遊ぶことにつながっていく。

実践から明らかになったこと

- * この時期の幼児は気の合う友達と遊ぶ中で、周りの幼児の様子に気づき、納得できれば自らを調整して遊びを進めようとする。
- * そのためには、まず、一人一人の幼児が、自己主張（自分を出す）できることが大切である。教師は一人一人の幼児の自己主張を受け止め、その中で起きるトラブルの機会を、幼児が相手の思いに気付くよい機会ととらえ、幼児自身が相手の思いに気付くように丁寧にかかわっていくことが大切である。
- * 幼児が相手の思いに気付くためには、自分の思いを受け入れられる喜びを繰り返し経験することが大切であるとともに、相手の思いに気づき、互いに分かり合える場を意図的につくることも大切である。

ひとことアドバイス

自ら環境をつくり、ルールをつくりその中で自分たちで切磋琢磨していくこと…。

この時期には、このような姿が見られます。また、そのような体験が十分できるような環境構成を仕掛けていくことが大切です。

ここがポイント

- ★ この時期には、自分と同じように、相手にも様々な思いがあるということに幼児自身が気付くような教師の援助が大切です。

Ⅲ 人間関係が深まり、学び合いが可能となる時期（協同的な遊び）

この時期は、幼児同士の間関係が深まり、「学び合い（協同的な学び）」が可能になる時期です。幼児は、今までの経験から友達と一緒に活動する中で、自分の考えや思いを言ったり、友達の意見を聞いたりして、立場や役割を意識して行動したり自分の役割を果たそうと努力したりします。幼児同士が互いの良さを認め合いながら、話し合い、協力し合って物事をやり遂げる中で、達成感、充実感を味わっていきます。それを繰り返して経験することで、幼児は自分の行動に自信がもてるようになり、自己を発揮して遊ぶようになります。

「協同する経験」をはぐくんでいくために、この時期には、一人一人の幼児がしっかり自己発揮できることを前提に、互いに刺激し合える仲間関係を築いていくことが大切です。

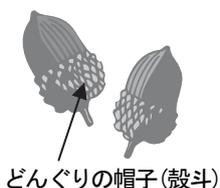
本事例3「ドングリ拾い」では、豊かな自然体験の中で、自分の見付けたことを主張し、友達とのやりとりを楽しみながらドングリ拾いをする幼児の姿を通して、この時期に必要な教師の援助について考えます。

ねらい

○ 友達に自分の思いや考えを話すとともに、友達の思いや考えに共感する。

幼児の姿

- ①ドングリ拾いに出掛ける。
- はじめは教師についてドングリ拾いをしているが、そのうち自分たちであちらこちらに分かれてドングリを拾い始める。
- A児「うわあー！いっぱいドングリがある」 B児「Aちゃん来てみて、こっちにいっぱい大きいドングリがあるで」 A児「ほんまや大きいドングリがたくさんある」 B児「僕のもの(僕の拾ったドングリは)大きいやろう」 A児「僕のものかってほら」 B児「ほんま大きいなあ」と自分たちが見付けたクヌギのドングリの大きさ比べをしている。
- C児「こんなドングリもあるで」と細長ドングリ(マテバシイ)を見付ける。教師が②「これは細くて長いドングリだねえ」と言うとD児「おにいさんドングリみたいやなあ」 C児「ほんまや、これもおにいさんドングリや」と家族に見立てたり、C児「ほら、ピカピカ光っているで」D児「テカテカしてる」 E児「茶色やしまの模様も付いているのもある」とドングリの様子を話したりしている。
- F児が「あっ、帽子かぶったままのドングリを見付けた」とドングリ(マテバシイ)を拾い上げるが、F児「あれ、帽子が取れちゃった」 G児「私も見付けたけど、拾ったら帽子取れてしまうねん」 H児「私もすぐに帽子が取れちゃうねん」と帽子が取れてしまうことを友達同士で不思議がっている。G児「緑色のドングリは(帽子が)取れへんのにねえ」 F児「あっ、ほんとや、(帽子が)付いたままや」と話をしている。③「へえー、緑色のドングリの帽子は取れないの。不思議だね」と教師も幼児の考えに共感する。



どんぐりの帽子(殻斗)

教師の援助・環境の構成

- 園外保育の下見をし、どこで、どんなドングリを見付けることができるか事前に把握しておく。
- ドングリを見付けた時の感動を幼児同士がそれぞれの思いや考えを言葉で表現できるように十分な時間や場を確保する。
- 幼児のつぶやきや発見を共通の言葉、細い・長いなど具体的なイメージがわくように声を掛け、幼児が互いに分かり合っかかわれるようにする。
- 幼児同士の気付きの伝え合いを見守り、「何だろう」「どうしてかな」など幼児の探究心や好奇心を揺さぶり、学びにつながるような言葉で共感する。

事例を分析する

発達の側面からとらえた幼児の育ち

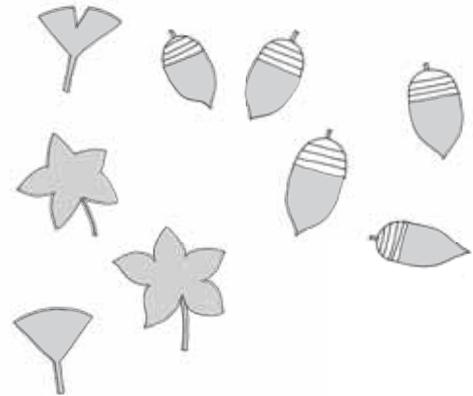
- ① ドングリの大きさ比べをしながら、互いのドングリの大きさを認め合い、ドングリへの思いを幼児同士で通わせている。
- ② 教師の言葉掛けがヒントとなり、ドングリに対するイメージが広がり、C児やD児やF児のように家族に見立てて擬人化したり模様に気付いて伝えようしたりするなどいろいろな言葉で自分の見たドングリを表現している。
- ③ 友達の「帽子の付いたドングリを拾うと帽子がはずれるのとそうでないのがあるのはどうしてかな？」という疑問に対して周りの幼児もそのことについて一緒に考え、同調したり、納得したりしている。

教師の読み取り

- 時期を逃さずドングリ拾いに出掛けたことで、好奇心や探究心を起こさせ、友達を大きいドングリのある場所に誘いかけ、一緒に大きさ比べに熱中する中で、友達を認め合うなどの言葉が出てきている。
- 幼児の言葉を受けて、教師が「細くて長い」とドングリを具体的に言葉で伝えたことで、イメージを広げて話したり、見たまま感じたままを素直に言葉で表現し合ったりすることができている。
- 友達の気付きの言葉から刺激を受け、自分も考えてみようとする姿が見られた。ドングリの色によって帽子（殻斗）の取れ方の違いに気付いた友達の考えに同調し、幼児同士で思いを共感し合っている。このように友達の話を聞いて自分の思いや考えを伝え合うことを繰り返すことが、協同する経験につながっていく。

実践から明らかになったこと

- * この時期の幼児は、友達と共通のイメージをもち、友達のよさや考えを受け入れ、遊びを工夫するようになり、言葉のやりとりが豊かになり、幼児同士でかかわって遊べるようになる。
- * このように幼児同士が伝え合いをしている様子などを教師は見守りながら必要に応じて遊びが高まったり、深まったりするような援助をし、その働き掛けによる幼児の反応や変化など育ちをしっかりとらえることが大切である。
- * また、友達と考え合う楽しさが感じられるようにするには、共通体験の場をもち、友達とイメージを共有し、友達の思いや考えに共感する機会や経験を重ねることが大切である。そして、教師も幼児のつぶやきや発見に気付いたり共感し合ったりして、幼児の学びへとつなげていくことが大切である。



ひとことアドバイス

幼児が「学び合う」ことは、ともに一緒にする活動を通してできていくことです。

ひとつの発見が、次の気づきを見いだし、さらに幼児同士の対話の中から様々な学びが生まれていきます。

ここがポイント

- ★ この時期には、友達とのかかわりが深められるように幼児の様子を見守り、幼児の達成感や充実感等、学びにつなげていくような教師の援助が大切です。

視点A 遊びを工夫する力はどうにはぐくまれていくか

幼児がより遊びを工夫しようとするのはどのようなときか。

- ・ 先生や友達の遊びに魅力を感じ、やってみたいと感じているとき
- ・ 素材や用具を見立てたり組み合わせたりしながら、遊びに必要なものを作ろうとするとき
- ・ やりたい目的が具体的にもて、それを達成しようとするとき
- ・ 不思議さや変化を感じ、試したり比較したりなど好奇心や探究心をもっているとき

友達と一緒に遊びを工夫しようとするためには、どのような教師の援助が必要か。

- ・ いろいろな素材や用具を試して遊ぶ経験ができるよう多様な環境を仕組んだり、使いたいものを選べる状況をつくらしたりする。
- ・ 「知っていること」や「したことがあること」を増やし、幼児のため込みを増やす活動を展開する。
- ・ 「もっとやりたい」や「試してみたい」という欲求を満たす、繰り返し遊べる場と時間を確保する。
- ・ 他の幼児の遊びに気付かせたり、たくさんの友達とかかわれる機会を意図的につくらしたりする。
- ・ 遊びのイメージが具体化したり共有したりできるように働き掛ける。

事例4 「忍者の修業の森で遊ぼう」

－ 2年保育 5歳児 10月－

ねらい

- 友達との遊びがより楽しくなるように、互いの考えを出し合って遊びを進める。

幼児の姿

- A児が、「落ちたらワニに食べられると思ったらがんばれる」と言いながら、登り棒に挑戦していたことを①クラスの皆に紹介すると、「ぼくもそうだ。忍者の修業みたいにがんばるとるんで」と話がつながる。運動会で経験した忍者のダンスからイメージが膨らみ、「忍者の修業の森」を作る遊びが始まる。
- A児の発想に共感し、修業に来た忍者をクマになって驚かす役を考えたB児が、「驚かすんだから…」と、クマが大きな口を開けているお面を作り始める。「Bくんすごい！ぼくも」とC児とD児が真似ながら作る。できあがったお面を付け、三人は修業のコースをたどりながらどこで驚かすか相談し始める。
- E児は、コウモリになって鉄棒にぶら下がり、忍者はジャンケンに勝たないと前に進めないようにしようとする。コウモリ役の子は四人。F児が、鉄棒(可動式)に足でぶら下がりジャンケンができるかを試す。「まだまだ大丈夫」とぶら下がっているF児に、「三回負けたら(コウモリの役)交替しよう」とE児が提案する。②教師は、E児の提案をF児がどのように受け止めるかを見守っていると、しばらくして、四人だとなかなか順番が回ってこないことに気付いたG児が、もう一台鉄棒を出し二人組でできるようにする。
- 修業のコースは、③目に付くところに置いていた巧技台や運動会で作った大道具を利用してつないでいく。しかし、各幼児が頭で描いているイメージを言葉でうまく伝え合うことができず、バラバラに動いている。そこで、入口から出口までどんな修業のコースにしたいのか、④設計図のようなものを描くことを教師が提案すると、数人ずつのグループに分かれて描き始める。描きながら新たな考えが浮かんだり気持ちがまとまったりしていく。
- クラスで⑤話し合いの時間もち、それぞれに描きあげたコースをもとに、全体像をまとめ、何で作り、どんなものがよいかなど確認し合い、共通理解ができるようにホワイトボードに書いていく。

教師の援助・環境の構成

- A児の発想や思いに共感し、クラスの皆に広げるよう、話し合いの機会をつくる。
- 幼児のやりたいと思ったことが実現できるよう、遊びの様子を見て、素材や用具を準備する。
- 言葉で伝えきれない自分の考えやイメージを、設計図のように描いて伝える方法を知らせる。
- イメージを具体化したり幼児の思いをつないだりするために、絵や文字にして表示したり話し合う機会をもったりする。

事例を分析する

遊びを工夫する姿からとらえた幼児の育ち

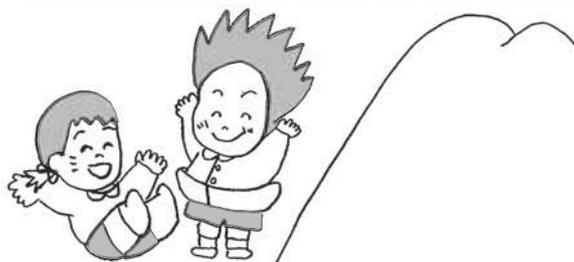
- ① A児の発想に共感し、忍者の修業を楽しむため「驚かす」という方法を考えたB児は、そのイメージを表すためにクマの表情を工夫する。C・D児は、友達の工夫に共感し同じように作るとする。
- ② F児は、どれだけ長くぶら下がるかと自分の力を試そうとしている。E・G児は、自分の思いも友達の思いも大事に考え、皆が楽しめるためにはどうすればよいかを考えている。
- ③ 巧技台や運動会で使ったもの等、身近にあるものを利用し、自分たちの考えているイメージを実現しようとしている。
- ④⑤ 一人一人イメージや目的をもち遊びを進めようとするが、たくさんの友達とは、イメージを共有したり、言葉で思いを伝えたりすることができにくい。

教師の読み取り

- A児もB児も、自分なりの発想を友達に認められたことで喜びを感じている。
- B児に共感したC・D児の三人で、同じものを作ることで仲間意識が芽生えてきた。
- F児は、自分の力を試すことに喜びを感じていて、仲間の気持ちにまで意識が働いていない。
- E・G児は、仲間とともに遊びを楽しむためにはどうすればよいかと考えてようとしている。
- 使った経験のある用具等は、幼児にとってイメージがわかりやすく、また、一から作るよりも再利用することでやりたい思いをすぐ形にでき、意欲を保ったまま遊びを進めることができる。そこから新たに遊びに必要なものを考え、加えていこうとしている。
- 気の合う数人の友達とは思いを伝え合いながら遊ぶことができるが、一緒に遊ぶ仲間が増えると、イメージや考えを言葉で伝えることに困難さやもどかしさを感じている。それでも友達と遊ぶ楽しさが分かり、教師のアドバイス等も得ながら、遊びを成立させようと工夫している。

実践から明らかになったこと

- * 幼児は遊びの中で、友達のよさに気付いたり、友達から認められたりすることが、友達とつながる(仲間意識をもつ)きっかけになる。教師は、友達とつながるきっかけを見逃さず保育に生かし、友達と一緒に遊ぶことで味わえる楽しさや喜びを存分に体感させることが、遊びを工夫しようとする原動力になる大切な援助である。
- * 気の合う友達同士では、イメージを共有し共通の目的に向かって遊びを進めることができやすいが、かわる人数が多くなると、幼児だけでは共通理解を図ることが難しくなる。
教師は、タイミングをとらえて話し合う機会を意図的に設定し、互いの思いを伝えたり、考えをだし合い遊びのイメージを具体化したりすることが、遊びを工夫する力をはぐくむためには大切である。



ひとことアドバイス

この事例で見られるように、教師が遊びの中にタイミングよく共通目標を導入すると、幼児たちの協同が活性化されます。

ポイントは、幼児たちが一緒にしてみたいという意欲を喚起するような、また、一人一人の力を合わせないと成し遂げられないような目標を示すことです。

ここがポイント

- ★ 幼児の興味・関心、遊びの状況を見極め、幼児同士の思いをつないだり、考え合うきっかけづくりをしたりする教師の援助が大切です。

視点B ルールをつくりだし守って遊ぶ力はどのようにはぐくまれていくか

幼児がルールをつくりだし守って遊ぼうとする時はどのようなときか。

- ・ それぞれの思いの違いから葛藤や衝突が生じ、ルールが必要になったとき
- ・ 友達と一緒に遊ぶ中で、もっと楽しく遊びたいという思いを感じたとき

友達と一緒にルールをつくりだし守って遊ぶようにするためには、どのような教師の援助が必要か。

- ・ 幼児一人一人が自分の思いを主張したり、また、友達の思いを聞き、葛藤等を繰り返す中で相手を受け入れることができるように、日頃から互いに意見が言える場づくりの機会を大切にとらえ、丁寧にかかわる。
- ・ 幼児同士が互いに折り合いを付ける体験を通して、相手にも自分と同じような思いがあることを幼児自身に気付かせていく。
- ・ 幼児同士が互いに納得するルールがつくりだせるように、幼児の発達の時期を十分に考慮する。
- ・ ルールがあること、守ることで、楽しく遊べることに気付かせていく。

事例5 「スケーター遊び」

— 2年保育5歳児 9月—

ねらい ○ スケーターで遊ぶ順番を友達と一緒に相談する。

幼児の姿

- A児「先生！B君が『C君、スケーターをかわってくれへん』って、泣いとるよー」
 - ①教師「C君、かわって欲しいって、泣いてるよ。」
 - C児「僕かて、今かわってもらったばかりや！」と声を張り上げかわろうとしない。B児は「かわってほしい」と泣き続けている。
 - ②D児「先生！大変なことになったらな、また呼ぶから来てえー」と教師を遊戯室の外に出し、その場にいた他児に集合をかけ、話を始める。
 - E児「泣いとるんやからかわってあげたらいいねん、なあ〜」「そうや！交替したり〜」と他児はE児に同調する。C児「何でや！僕かて、ちょっとしか乗ってない！」F児「じゃー、C君がもうちょっと乗ったら、次はB君の順番にしたらいんと違うか」G児「えーっ、僕かて乗りたいやん！ジャンケンで勝った順番にしたらいんやんか！」A児「そんなんあかん！ジャンケンに負けたら乗られへん……」少し考えてから「テラスの端から端まで行ったら交替するんやったらいいけど」と提案する。G児「テラスまで乗って行かへん」と反対される。
 - D児「そうや！乗っている人が疲れたらかわるといのはどうや？」一瞬、顔を見合わせていたが「そうや！そうしょう。それがいいわ」と賛同する。
 - ③そこで教師は、「相手が疲れるまでずーっと待てるの？」と声を掛け、自分が待つ方になってもずーっと待てるのか、一人一人に聞いてみる。全員「嫌だ」と答える。教師「多分、自分が嫌なことは相手も嫌だよ。何か違う方法はないの？」と促す。
 - H児「遊戯室をぐる〜と一周したら交替したらいいんちゃう？」A児「それはいい考えや！そうや駅を作ったらいいねん。かわってほしい子は駅で待っていたらいいねん」とすばやく反応する。他児も「うん・うん」とうなづく。教師「待っている子がいなかったらどうするの？」
 - D児「もう一回行ってもいいことにしよう！なあー？」他児も全員が賛同し、「駅」を作り始める。
- ★遊び終了後、相談したことを伝える場をクラス全体でもつ。



教師の援助・環境の構成

- 外で使用していたスケーターを室内でも使えるように幼児と洗車をし、よりスケーター遊びに興味をもてるような環境をつくる。
- スケーターの台数を制限することで、幼児同士が互いに譲り合って使う等、折り合いを付けていく体験が得られるようにする。
- D児の自分たちで問題を解決していこうとする思いに寄り添い、自分たちでルールを考える機会を見守り、みんなが納得できるルールであるかどうかを見極め声を掛ける。
- D児たちの気付きや考え合ったことをクラス全体で伝え合うことにより、遊びのきまりに共感させ、みんなで守って遊ぶ楽しさを体感させる。

事例を分析する

ルールをつくりだし守って遊ぶ姿からとらえた幼児の育ち

- ① 自分の遊びに夢中になっていると、傍でB児が泣いていても気付かず、自分の遊びを続ける。スケーターの台数に限りがあるので、乗りたいときに十分に乗れない状況があり、感情がぶつかり合っているが、けんかにはならない。
- ② どうしたらいいのか考えようとするD児を中心に、それぞれの幼児が自分の思いを伝えようとしている。「みんなが、スケーターで遊ぶためには」という共通の目的のもと意見を出し合っている。友達の意見に反応して自分の意見を言おうとする姿が見られる。
- ③ 「疲れたらかわる」というルールを見つけますが、教師の「ずーっと待てるの?」という問いかけに、「それはできない」「嫌だ」ということに気づき、違う方法を考えている。一学期に遊んだ電車ごっこの経験を思い出し、駅で交替する方法を考え、幼児同士、納得し合って遊びを再開している。

教師の読み取り

- それぞれが自己中心的な思いであっても、互いの思いを出し合える関係が育っている。自分の思いと違っていても、葛藤しながら、他者の意見を受け入れることができるようになってきている。
- 友達と相談しながら、物事を決めようとする姿が見られる。みんな、スケーターに乗りたい、そのためにどうしたらいいのかということを考えている。友達の考えに同調したり、反対したりしながら、折衷案を考えている。誰かの言いなりになるのではなくそれぞれの考えを理解しながら方法を考えようとしている。この関係性こそ、幼児が折り合いを付けている状況ととらえることができる。

- 「楽しい、おもしろい」と体感した遊びを、繰り返し友達と一緒に試そうとしている。楽しい経験は幼児の心のため込まれていく。
- 「疲れたらかわる」という幼児の考えで進めることも考えられるが、早く遊びを再開し幼児たちに満足感を味わわせるためには、このように、教師が幼児の行動を予測して声掛けをしていくことも大切である。幼児同士で試行する中で、自ら考えたルールが納得するものであるのかどうか、気付くように援助することが「協同する経験」につながっていく。

実践から明らかになったこと

- * 日常の保育の中で、自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりすることを大切にし、必要に応じてみんなで考えを伝え合う「話し合いの場」を大切にする。
- * 本事例のように「スケーター交替」でトラブルが生じ、楽しく遊べないことが、ルールをつくり出す必要性につながっていったことから、あえて、用具類の数を少なくしたり、必要なものが身近になくて困ったりするような、幼児が自分たちで調整したり考え合ったりできるような環境を考えることも必要である。
- * 幼児のやろうとすることを見守り、幼児に任せていくことも大切で、その際、いろいろ試行錯誤したり、トラブルが起こったりするが、「やって楽しかった」「よかった」という経験につなげていく援助が必要である。

ひとことアドバイス

この事例は、道具の使用順を争うという典型的な葛藤場面です。自己抑制がきかない幼児が無理を言い始めた場面こそ、教師の出番です。

ここでは、教師が合理的な理由や新たな工夫を一人一人に問い、幼児たちに自己主張の機会を与えています。

このように、自己抑制と自己主張をとともに高めるには、意見をきちんとだし合う機会や経験を繰り返し与えることが重要です。

ここがポイント

- ★ 幼児にとって、失敗体験は成功体験と表裏一体であることを認識し、失敗したこと、がまんしたことが成功感や満足感につながっていくような教師の援助が大切です。

視点C 言葉による伝え合う力はどのようにはぐくまれていくか

幼児が言葉で伝え合おうとする時はどのようなときか。

- ・ 集団生活の中で自分の居場所を見付け、心の安定や安心を感じ始めたとき
- ・ 友達と同じイメージをもって一緒に遊ぼうとするとき
- ・ 感動体験（自然との出会い、初めてのこととの出会いなど）をしたとき
- ・ 仲間意識が高まり、共通の目的をもって遊びを実現させようとし始めたとき

幼児が言葉で伝え合おうするために、どのような援助が必要か。

- ・ 幼児の表情や仕草、雰囲気などから、言葉になる前の言葉、言葉にならない言葉、心の中の言葉(内言)を大切に受けとめていく。
- ・ 幼児が自分の思いや考えを言葉で表現したり、他者の言葉にじっくりと耳を傾けたりすることができるように、幼児同士の思いが共有できるような話し合いの場を設定する。教師は幼児の発言を受け止め、幼児同士が理解し合えるように、意識してそれぞれの思いをつなげるなどの言葉掛けをする。
- ・ 友達と考えや意見を伝え合ったりしながら、自分たちで遊びをつくる楽しさや充実感が味わえるように、遊びを見守ったり、必要に応じて幼児同士の遊びをつなぐ等、遊びの仲介をしたりする。

事例6 「リレーごっこ」

— 2年保育 5歳児 10月 —

ねらい

- 友達と一緒に共通の遊びを楽しんだり、相談したりしながら遊びを進める楽しさを味わう。

幼児の姿

- 好きな遊びの中で友達と誘い合ってリレーを繰り返し遊んでいる。

①園庭に用意されているコーンやバトン、スタートラインを見付けると、A児「リレーしよう！」B児「しよう、しよう」C児「入れて」A児「いいよ」

B児「こっちのチーム、5人。そっちは？」C児「こっち4人しかいないからどうしよう」

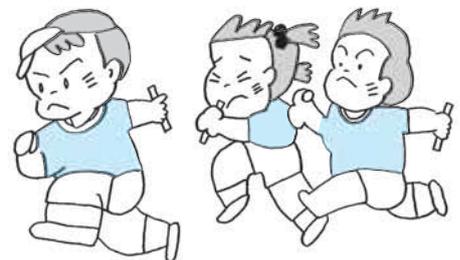
D児「だれか探してくる」C児「じゃあ、呼んできて」D児が探しに行っている間に集まっている幼児たちでチーム分け（人数合わせ）が始まる。E児がやって来て加わり、リレーが始まろうとするが、そこへD児が「友達、呼んで来たよ」とF児を連れて帰ってきた。A児「5人对5人になったから、早く始めよう！」G児はA児の「始めよう」の声を聞いて先頭に立ちバトンを持って用意する。相手チームのH児もバトンを持ち、「先生、スタートして」と言う。B児「だめやで、まだちゃんとそろってないで」C児「人数が合っているか、もう一回数えてみよう」

A児「えー、Eくん入ったから合ってるで」

B児「そうやけど、Fちゃんも来たで」

②教師「今、EくんとFちゃんが入ったよ、どうするの？」

B児「もう一人また呼んでこないとあかん」と探しに行っている間に他から「入れて」と一人増え、一緒にする友達を連れて戻ってくるとまた合わないということを繰り返し、何度かするうちにやっと人数が合う。A児「よし、始めるで〜」
やっとリレーが始まる。



教師の援助・環境の構成

- すぐにリレーをして遊べるように、リレーに必要な用具類（コーン、バトン、アンカーたすき等）を用意し園庭に設定しておく。
- チームの人数が合っていないことに、幼児たちで気付けるような言葉を投げ掛ける。
- 幼児たちで考えをだし合いながらチーム分けをしていけるように、遊びを進めていく様子を見守り、状況を把握しながらうまくチーム分けができるように声掛けをする。

事例を分析する

言葉の伝え合いをしている姿からとらえた幼児の育ち

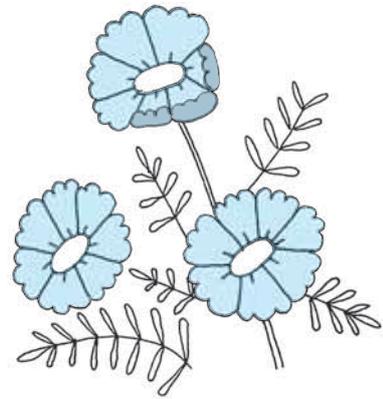
- ① チームに分かれて対抗する楽しさが分かり始めると幼児は、自分たちでチームの人数を数えたり、同じ人数に揃えてからリレーを始めたりしようと自分の考えを主張し合って遊びを進めている。
 - ・ 人数を数える幼児、新しいメンバーを探しにいく幼児等、自然に役割分担のようなことができている。
- ② リレーを始めるにあたって、チーム分けや人数調整が必要だと思っているが、何人の幼児が入ってきたのか状況がよく把握できている幼児もいれば、とにかく早く始めたいと思っている幼児もいて、一人一人の思いは様々である。

教師の読み取り

- 学年活動としてクラス対抗リレーに取り組み、チームに分かれることや人数を合わせる経験を積み重ねてきたことで、自分たちでチーム分けをしたり人数調整をしたりしながら、リレーの楽しさを味わえるようになってきている。
- 友達と一緒にリレーがしたいという思いが共通の目的になり、幼児は自分の考えを言葉で伝え合い、自分のできることを考えて行動しようとする。
- 幼児同士で遊びを進められるようになってきた時期ではあるが、一人一人の幼児のしようとしていることや周りの状況をどの程度理解しているのか、同じ場で遊んでいても遊びに対する状況のとらえ方は一人一人違っている。しかし、教師が幼児同士の言葉のやりとりや表情を見守りながら適時に声を掛けることで、幼児がその場の状況に気付き、みんなで分かり合って遊びを進めていくことができるようになってきている。

実践から明らかになったこと

- * 「協同する経験」を重ねていく中で、幼児同士の思いをつないでいくという視点からも「言葉」のもつ意味は大きい。日々の保育の中で、幼児が自分の思いを言葉にして表現すること、友達の言葉に耳を傾け聞こうとすること、互いに聞き合い理解し合うことを重ね、響き合える仲間関係を築いていくことが大切である。
- * 幼児同士で遊びを進めようとする姿を見守り、話し合っている様子から一人一人の幼児が理解していること、理解していないことを的確に把握し、幼児同士が分かり合って遊びを進めていけるように互いの思いや言葉をつないでいく援助が大切である。
- * 教師は、一人一人の幼児の思いを把握し、幼児同士の話し合いの流れを止めないように遊びのヒントとなるアドバイスをすることが大切である。そのような援助を教師が意識することで、幼児は互いの考えに気付きながら遊びを実現しようとし、自分たちで遊びを進めていくことができたという充実感・満足感を味わっていく。



ひとことアドバイス

言葉は幼児がお互いに必要感をもってこそ有用なものになります。

そして、適切な言葉で相手に伝え、また、相手の言葉の意味を受け取れること、このキャッチボールこそが生活の中で伝え合える言葉を育てていくのでしょ

ここがポイント

- ★ 一緒に遊んでいても、幼児一人一人の遊びに対する思いや考えが違うことを認識し、幼児同士で話し合って遊びを進めていけるように幼児の思いや言葉をつないでいく教師の援助が大切です。

事例7 「公開保育の定例化」

【園内研究のねらい】

職員構成

園長、主任、教諭5名、
支援補助員2名、用務員 合計10名

- 公開保育を定例化し、教師間で保育を見合い振り返ることで、幼児にとっての最善の手立て、方法を明らかにし、次の援助へつなげる。

園内研究体制の構築状況について

- ・ 研修担当を決め、研修計画の立案、実施にあたって中心となって進めていく。
- ・ 記録や実践のエピソードから幼児の姿、育ち、教師の援助について日々研究協議を行う。協議した内容を踏まえ、各自で振り返り、次の日の保育に生かすようにする。
- ・ 講師を招聘した園内研究会を計画し、各教師が公開保育をし、その後研究協議を行う。
(6月、9月、10月、11月、12月、1月に実施する)

Plan

公開保育を通して幼児理解を深め、具体的な指導方法や環境構成の工夫等、保育の改善を図る。



9月の公開保育・研究協議より (9月18日ー3年保育3歳児22名ー)

Do (公開保育の内容)

- 【ねらい・内容】 ○ 教師や友達と一緒にマット遊びをする楽しさを感じる。
- ・ みんなと一緒にマットで遊ぶことを楽しむ。
 - ・ 自分の気持ちを態度や言葉で示そうとする。

【教師の援助 ☆環境構成】

- ☆ 広く遊べる場所を確保するために、椅子をテラスに出す。椅子の安全な持ち方を知らせる。
- ☆ 友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを感じられるように、マットの用意をする。
- ☆ 遊びが崩れてしまうときは、教師が環境の再構成をする。
 - ・ 友達と一緒に遊ぶことを楽しいと感じられるような遊びの提供をする。
 - ・ 自分が1番、自分がしたい、という気持ちを受けとめた上で、順番を守ることの大切さや守ることで心地よく楽しく遊べることを伝えていく。

【公開保育の実際】

- ・ マットを出した瞬間に、そのマットに飛び乗り、転がって遊ぶ。A児「入れない」と訴えてくるので、教師「みんなに言ってみたらどうかな？」と伝える。A児「入れて」と言うが周りの幼児に言葉が届かない。A児が困っている様子に気付いたB児が場所を開けようとするが、身動きがとれず場所があげられない。教師「残念だね」とA児に話した後、全員に「みんなでマットに座ってみようか？」と提案し、みんなと一緒にA児もマットに座る。
- ・ 教師「じゃあ、今から『魔法のじゅうたん』をしてみようか？」と、マットを引っ張る。全員が乗っているため、動かない。教師「いいこと考えた！順番に乗ってみようか？」と提案し、交替でマットに乗り、教師がマットを引っ張り『魔法のじゅうたん』ごっこを楽しむ。



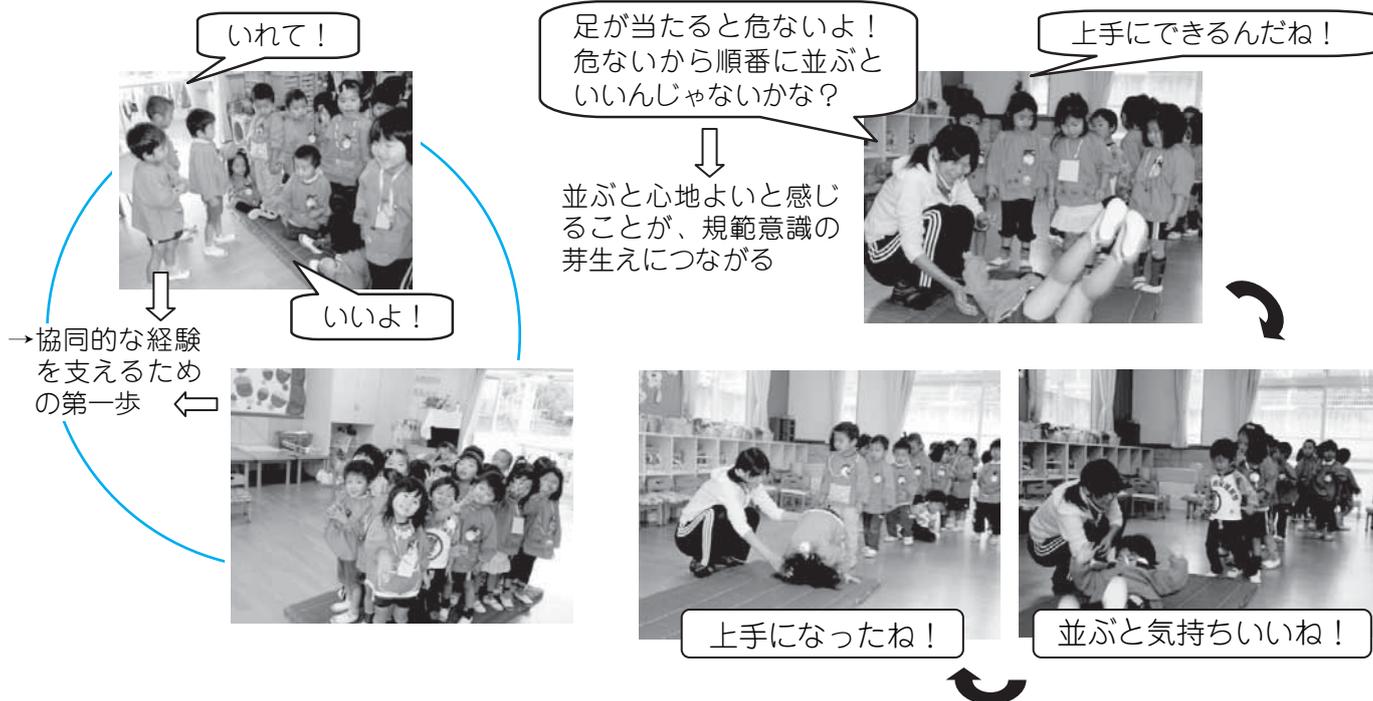
Check (研究協議)

- 【保育者の反省】 ○ 新しい遊びを提供する時に、幼児たちがどうやって遊ぶかをもっとイメージをしておかなければならないと感じた。遊びの中で幼児たちのイメージしたつづきを受けとめ、保育を創造する力を身に付けておかなければならないと感じた。
- 【参観者の意見】 ○ 教師の“魔法のじゅうたん”という言葉でみんながイメージを共有し、次にする活動に期待を寄せている。A児が困っているときにB児が気付き、何とかしようとする姿は、日々の生活の中で、トラブルや葛藤を経験しながら、相手を思う気持ちが育ってきているのだと感じる。
- 【講師の指導助言】 ○ 3歳児なりの協同的な経験につなげていくために、いろいろな遊びを十分に体験し、その体験を教師が言葉で経験化させ、遊びを蓄積させていくことが大切である。保育室という時間と空間を共有して遊ぶということは、守らなければならないことがあるということである。3歳児は、特に教師がモデルとなり言葉や態度で伝えていき、文化としてのルールを伝えていく必要がある。

Action (改善に向け、工夫したこと)

- 3歳児のこの時期に友達とかかわっていく方法を、信頼できる教師が言葉や態度で具体的に示していくことが大切である。ルールを守ることによって気持ちよく遊べるという体験をすることの繰り返しにより、それが、規範意識の芽生えの土台になっていくと思われる。
- 次の保育に向けて、改善点
 - “みんなでする楽しさを十分に味わう” 協同する経験につながる
 - * 全員が満足して座ることができるようにする。→ マットを増やす。
 - * 待っていれば友達が来てくれる、変わってくれるという体験をする。→ マットに寝転がり、オニを交替する遊びをする。
 - * きまりを守る遊びの提供をする。→ 前回りをする。安全に遊ぶための方法を身に付ける。

New Plan (研究協議を踏まえて)



PDCAサイクルに基づく園内研究体制を構築していることの成果と課題

成果

- * 公開保育を通して他の教師の保育を見合い研究協議をすることで、自分の保育を振りかえり、自分の保育の弱い点について自覚することができる。また、保育を見直す観点をはっきりとつとめることができる
- * 他の教師や講師の指導助言を聞くことで、幼児の姿を多角的にとらえ、的確な幼児理解につながる。
- * 幼児をはぐくむための共通の展望をもち、そのための専門性を高め合える関係性ができてくる。

課題

- * 毎日の保育について、話をする時間をとっているが、全員でその保育について、しっかりと話し込み、次にどうしていくのかの話し合いの時間が確保されにくいのが現実である。
- * 教師自身が素直に周りの意見を受けとめ、それを次の保育につなげられるように自分自身の質の向上を図ることが引き続きの課題である。

ここがポイント

園内研究体制の構築に向けて

- ★ 教師が順番に公開保育する機会をつくり、実際の保育を通して、全職員で幼児理解や具体的な教師の援助の在り方について研究協議し、ともに学び合える園内研究の機会を年間計画に位置づけていくことが大切です。

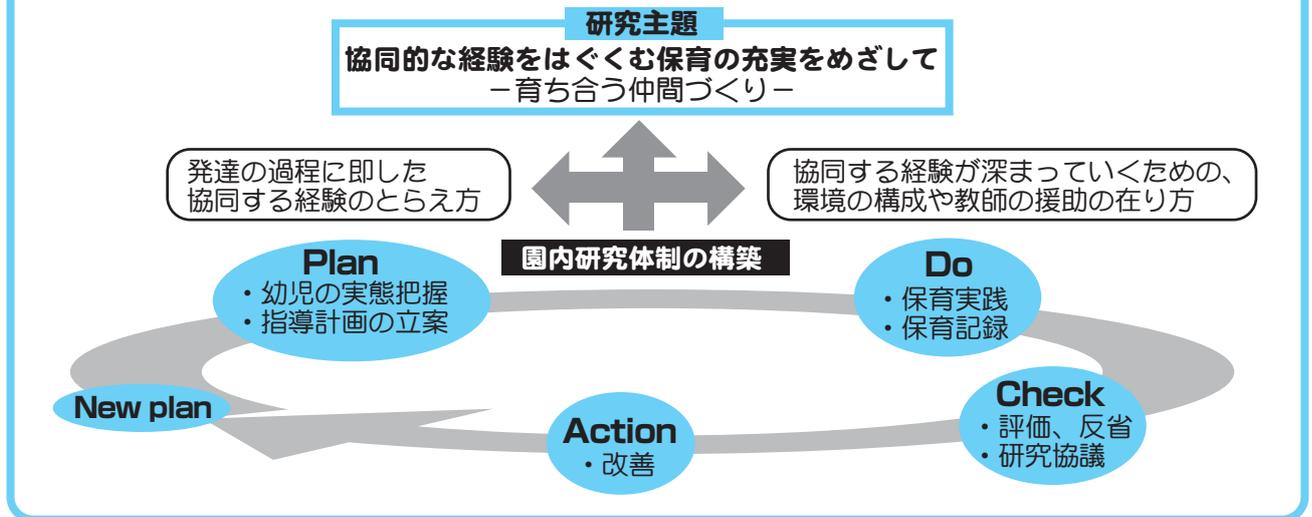
事例8 「幼児理解を基盤とした園内研究」

職員構成 (7名)

園長、教諭(担任)4名、
スクールアシスタント、園務員

園内研究体制の構築状況について

- * 全職員が、「協同する経験」について理解を深める。
- * 幼児理解に基づいた指導方法を明らかにし、計画的に指導する。



Plan (幼児の実態把握) → 視点表を用いた客観的な幼児理解から、保育の見直しを図る。

自己主張と自己抑制の観点から幼児理解を図る

- 幼児教育支援委員会で、自己調節機能の発達について学ぶ機会があった。その中で、自己主張と自己抑制をバランスよく獲得することが大切であることや、教師のいわゆる「気になる子」はそのどちらかが低かったりどちらも低かったりする傾向があることが分かった。
そこで、教師の主観的な幼児理解のみならず、客観的な幼児理解を図り、幅広い視野で見とれるようにと、判断基準となる「視点表」を利用することを試みた。ここでは、抽出児A児について詳細に記載する。

参考：視点表について

- 20の質問項目(8項目が自己主張、12項目が自己抑制)からなる。
例) ・ 入りたい遊びに自分から「入れて」と言う。
・ 他の子どもと自分の考えが違っているときでも主張する。
・ 他児のものが欲しくてもがまんする。
・ (ブランコやすべり台、おもちゃの貸し借りなど)遊びのなかで自分の順番を待つ。等
・ それぞれの質問について、1ほとんどない 2 やや少ない 3 ふうふう 4 やや多い 5 きわめて多いの5点で集計し、それぞれの得点とする。

〈A児についての幼児理解を深める〉…2年保育5歳児5月

自己主張得点…27
自己抑制得点…51

— 担任教師によるA児の理解 —

- やりたい遊びが見付かると夢中になって遊ぶ。自分なりの実現したい思いをもち、友達ともかかわれるが、やり遂げるところまで友達と一緒に…と、なりにくいところがあり、途中で遊びから抜けてしまうことがある。B児と一緒に行動することが多いが、いつもB児から誘っていてA児から誘うことは少ない。

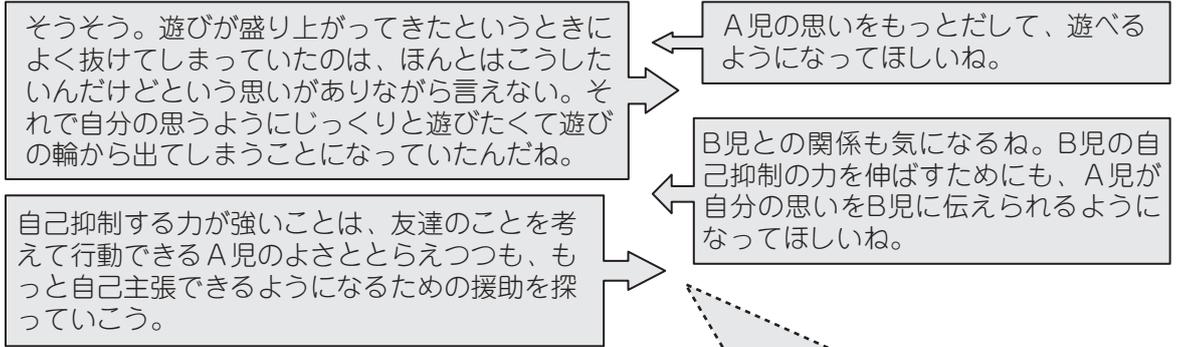
— 担任教師によるA児の理解 —

A児のこと、友達と仲良く遊んでいるとは感じていたけど、どこか物足りなく友達とのかかわり様が気になっていたね。

でも問題というとは感じていなくて、今までA児のことを特に問題視してこなかったよね。

友達とのかかわり様が気になっていたのは、視点表の得点から判断すると、他児に比べて、自己主張(27点)と自己抑制(51点)の得点の差が大きいことに表れているね。

よく考えてみると、仲良くというよりは友達とトラブルになることを避け、意見がぶつかり合う前に、譲っていたところがあるよね。



職員間で話し合い共通理解したこと

- * 教師が主観的に幼児理解したこと、「視点表」を使って点数化したものとを対比することで、自分の読み取りの見直しができたり、課題がより明確になったりする。
- * 自己主張をする力と自己抑制ができる力を付けることだけでなく、二つの力が幼児のなかでバランスよく育っていくことが、友達と協同して遊ぶために大切であることを、点数化することで再確認する。
- * 今まで、自己抑制に比べ自己主張が強い幼児のことを問題視し言葉掛けが多くなりがちであったが、自己主張しきれない幼児の力を付けることが、協同して遊べる仲間づくりをするうえでとても大切であることに気付く。

Do (保育実践の中でA児へのかかわりで配慮すること)

- ・ A児と他児との遊びの様子をさりげなく見守り、A児が、他児に合わせようとしたときや譲ろうとしたときの気持ちを探る。
- ・ A児らしさを認めながら、状況に応じて、本当にそれでいいのか等の気持ちを引き出したり、友達に気持ちを伝えるやり方を具体的にアドバイスしたり、友達との橋渡し役をしたりする。
- ・ A児の言葉に表さない思いに、他児が心寄せられるようないろいろな機会をとらえて考え合ったり伝え合ったりするとともに、A児のがんばりやよさをしっかり認め、自信につながるかかわりに努める。

Check (A児の10月の実態)

—担任教師によるA児の理解—

- ・ 自分の本当にやりたい遊びでなくても友達に誘われると一緒に遊ぶ姿が見られたが、以前よりその遊びの中で楽しそうな表情が増えた。
- ・ 遊びが盛りあがりたくさんの友達が集まってくると退いてしまうことはあったが、友達に直接思いが言えなくても教師に伝えたり、自分から気の合う友達を誘って遊ぼうとしたりすることが多くなってきた。

自己主張得点・・・32
自己抑制得点・・・52

Action (今後の取組)

- ・ A児へのかかわりの成果が、自己主張得点の伸びに表れている。今後も配慮点を継続していく。
- ・ 気の合う友達とのかかわりだけでなく、もっといろいろな友達とかがわれるように、グループ活動を取り入れたり励ましたりしていく。
- ・ A児のやりたいことを明確にしなが、目的に向かってがんばったり、やり遂げた喜びが味わえたり、また、友達と一緒に達成する経験が積み重なっていくよう、指導計画を検討し実践していく。

PDCAサイクルに基づく園内研究体制を構築していることの成果と課題

- * 「視点表」を用いたもうひとつの幼児理解に試みたことで、それぞれのクラスで気になる幼児について話し合い、今まで以上に全職員で幼児理解を深めることができた。また、クラス担任が責任をもって幼児の記録をとってきたが、PDCAサイクルにのせて幼児理解について語ることで、記録が記録で終わらず、次へのステップアップに生かされるものになってきた。
- * 一人一人の幼児理解を深め、教師が同じ姿勢で保育にむかえるようにするためには、PDCAサイクルを生かした園内研究は大変有効であるが、時間を見つけたし継続していくことが課題である。

ここがポイント

園内研究体制の構築に向けて

★ 保育について、職員でいっぱい話し、共通理解を深めることが大切です。

事例9 「毎日が園内研究」

【園内研究のねらい】

職員構成（6名）

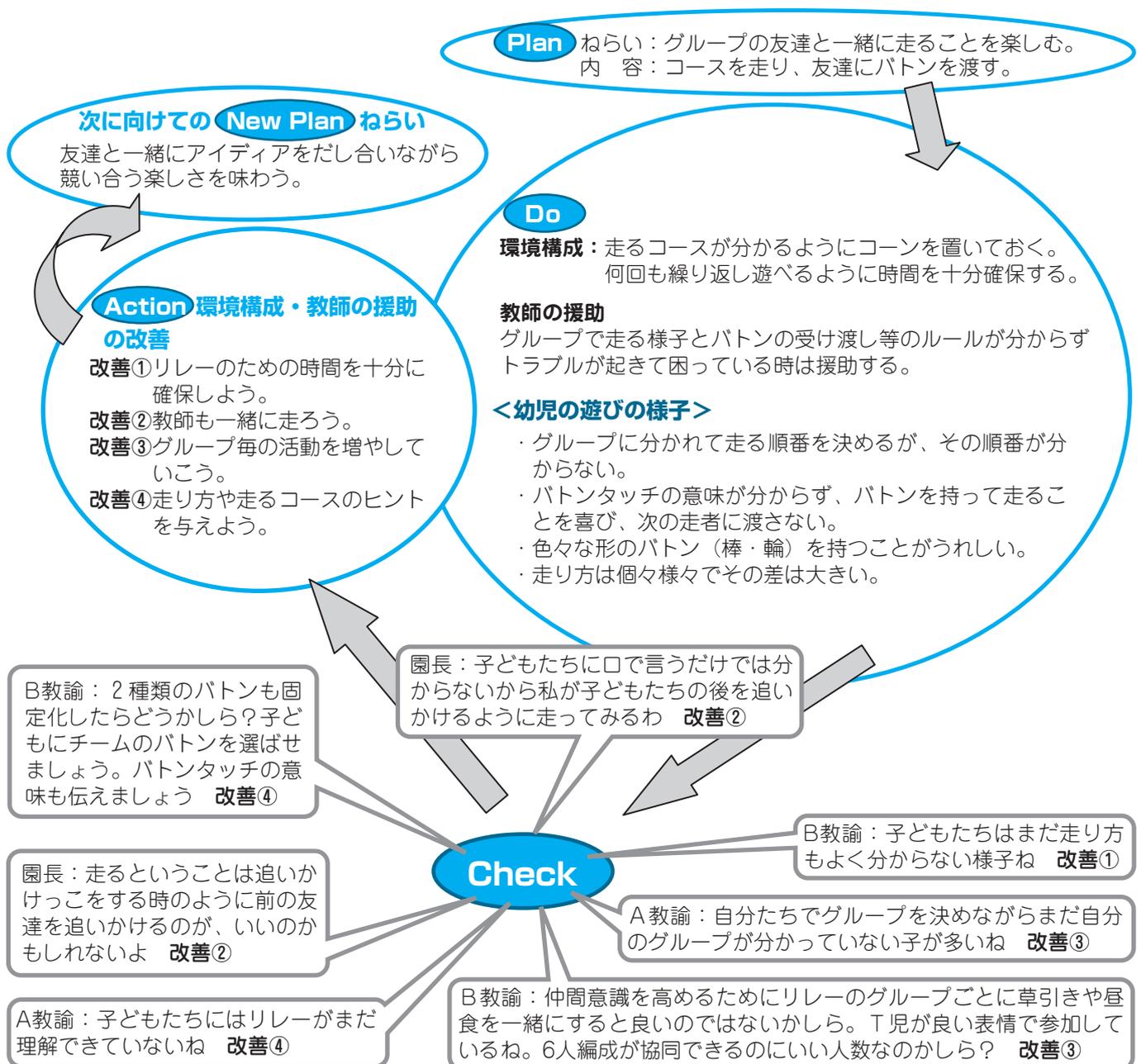
園長、教諭、助教諭、養護助教諭、
介助ボランティア（週2日）、用務員

- 日々の保育が研究目標に向かって進んでいるか、保育から課題を見付け解決方法を協議する。

園内研究体制の構築状況について

- ・ 園内研究体制のねらいを「日々の保育が研究目標に向かって進んでいるか、保育から課題を見付け解決方法を協議する」ことにおき、好きな遊びの場面ではチーム保育を生かし連携して、複眼思考で保育を実践する。
- ・ 毎日が園内研究であり、保育進行中にも即座に職員が協議し、環境の再構成ができるような体制を構築している。
- ・ 保育の事後のカンファレンスの中で「遊びを工夫する力（思考力の芽生え）はどのようにはぐくまれていくか」という視点で協議し、子どもの姿や教師の援助・環境構成等職員間で気が付いたことを情報交換しながら環境を再考していく。
- ・ 記録（つぶやき、状況を書き取る、デジタルカメラ、ビデオでの記録等）を継続して取り、保育カンファレンスに生かす。

チーム保育を生かした保育カンファレンスの実際



Checkを具体的に示す

保育の改善に向け、協議したこと

- 幼児の思いや行動と実際の教師の願いとのズレについて協議する。
 - ・ 走ることそのものが分かっていないので、体のどの部分をどのように動かせば良いのか、もっと具体的に分かりやすく幼児に知らせていく方法について考える。
 - ・ リレーという意味を分かりやすくどのように知らせていくか。
 - ・ リレーよりも運動会の他の種目に費やす時間が多かったことを踏まえて、リレーが十分にできるように時間の確保を見直していく。
- グループの仲間意識をもたせるためにはどのような指導の工夫が必要かについて協議する。
 - ・ 仲間意識が確立すればグループで協同しようとする姿につながっていくのではないか。

次の指導に向けて改善すること

- 環境構成・教師の援助について共通理解を図る。
 - ・ リレーのための時間を十分に確保する。
 - ・ 教師も一緒に走り、幼児に体のどの部分を動かせばよいのかモデルを示す。
 - ・ 走り方や走るコースのヒントを与える。
 - ・ バトンタッチの意味や受け渡しの方法を具体的に個別指導していくとともに幼児同士の思いがつかえるように互いの気持ちも確かめていけるようにしていく。
 - ・ グループ毎の活動を増やしていく。
- 6人編成が協働できるのに適当な人数ではないか。
 - ・ 仲間意識を高めるために、リレーのグループで掃除や草引き等の作業を一緒にする等普段の生活の場でも協同の活動を意図的に増やしていく。

次に向けての New Plan

ねらい 友達と一緒にアイデアをだし合いながら、競い合う楽しさを味わう。

PDCAサイクルに基づく園内研究体制を構築していることの成果と課題

成果

- * 毎日継続して保育記録を取ることで、遊びの流れや幼児の思い、また、教師の姿勢や援助についてはっきりと見えてくる。この記録を基に、全職員でカンファレンスすることにより、多角的に幼児の内面を見取り、一人一人の教師の幼児理解が深まり、発達に即した適切な援助の在り方を明確にして実践に生かしていくことができる。
- * チーム保育を通して、保育中の幼児の活動を、その場でCheckし合いながら保育を進めていくことで、より教師の援助や環境構成等課題が明確になり、教材研究や支援方法を再考することができる。このように常に全職員で協議し、改善していくことが、教師の資質向上につながっていくとともに、幼児の学びや遊びの質の高まりにつながっていく。

課題

- * 少ない職員構成であるが、全職員が揃う時間がなかなかとれない。毎日10分でも15分でも時間を確保し、継続して取り組むことが大切である。
- * カンファレンスを通して全職員で共通理解した改善策を生かし、より保育の充実を図っていくためには、一人一人の教師がこの改善策を十分に理解し、具体的な指導方法を考え、実践に生かしていく指導力を身に付けていくことが大切である。

ここがポイント

園内研究体制の構築に向けて

- ★ 毎日、少しの時間でもカンファレンスの時間をとり、継続して取り組むことが大切です。そのために、一人一人の教師が記録を取り、幼児の内面を見取る力（幼児理解）、自分の保育の課題（指導方法）等について明確にしていくことが大切です。

V 協同する経験を重視した教育の充実にむけて

実践研究から得られた成果

研究協力園6園において行った実践研究から、「協同する経験」を視点として以下のような実践上の成果が明らかになりました。今後、各園においてはこれらを参考に、地域、幼稚園、幼児の実情に応じた保育が展開される中で、さらに多くの教育効果が得られると考えます。

◆ 「協同する経験」は人とかかわる力を豊かにはぐくむ

- 幼児は友達と協同して遊ぶことを通して、「自己の世界」から「他者とかわる世界」へと、もの見方や考え方、人間関係を広げていきます。そのために、幼児の発達に必要な体験を積み重ねられるよう保育内容を見直し実践していくことが大切です。
 - * 多様な感情体験や自己を発揮し認められる体験
 - * 葛藤やつまずきの体験
 - * 自己の思いを主張し合い、折り合いを付ける体験
 - * とともに楽しみ共感し合う体験
 - * 友達と目的に向かって、力を合わせてやり遂げようとする体験

◆ 「協同する経験」を通して、一人一人の自発性を育てる

- 幼児が協同して遊ぶようになるためには、一人一人がその子らしく遊ぶことができるように、自発性を育てることが基盤におかれなければなりません。幼児は、自己を表出して遊びを展開しながら少しずつ周囲との関係を築き、その中で一人より友達と遊ぶことが楽しいことに気づき、自己を主張することや自己を抑制することを体得していきます。

◆ 自己主張と自己抑制のバランスがより豊かな人とのかわりを深める

- 幼児が協同して遊ぶようになるためには、自己主張が強すぎても、また、自己抑制が強すぎても友達との関係性はうまく築いていくことはできません。例えば、自分の思うようにならないと気がすまない幼児は、自己抑制が弱いため友達と一緒に活動を展開することができにくく、トラブルの原因になることが多くなります。

また、反対に友達のいいなりになってしまう幼児は自己抑制が強く、同じ関係の中で遊びを展開していくというよりは、自分の思いを抑え遠慮がちになってしまいます。このことから、ともに協同して遊ぶようになるためには、友達と対等の関係性が築けるような自己主張と自己抑制のバランスが保たれることが大切です。

◆ 「協同する経験」は幼児にとって大切な学びの場である

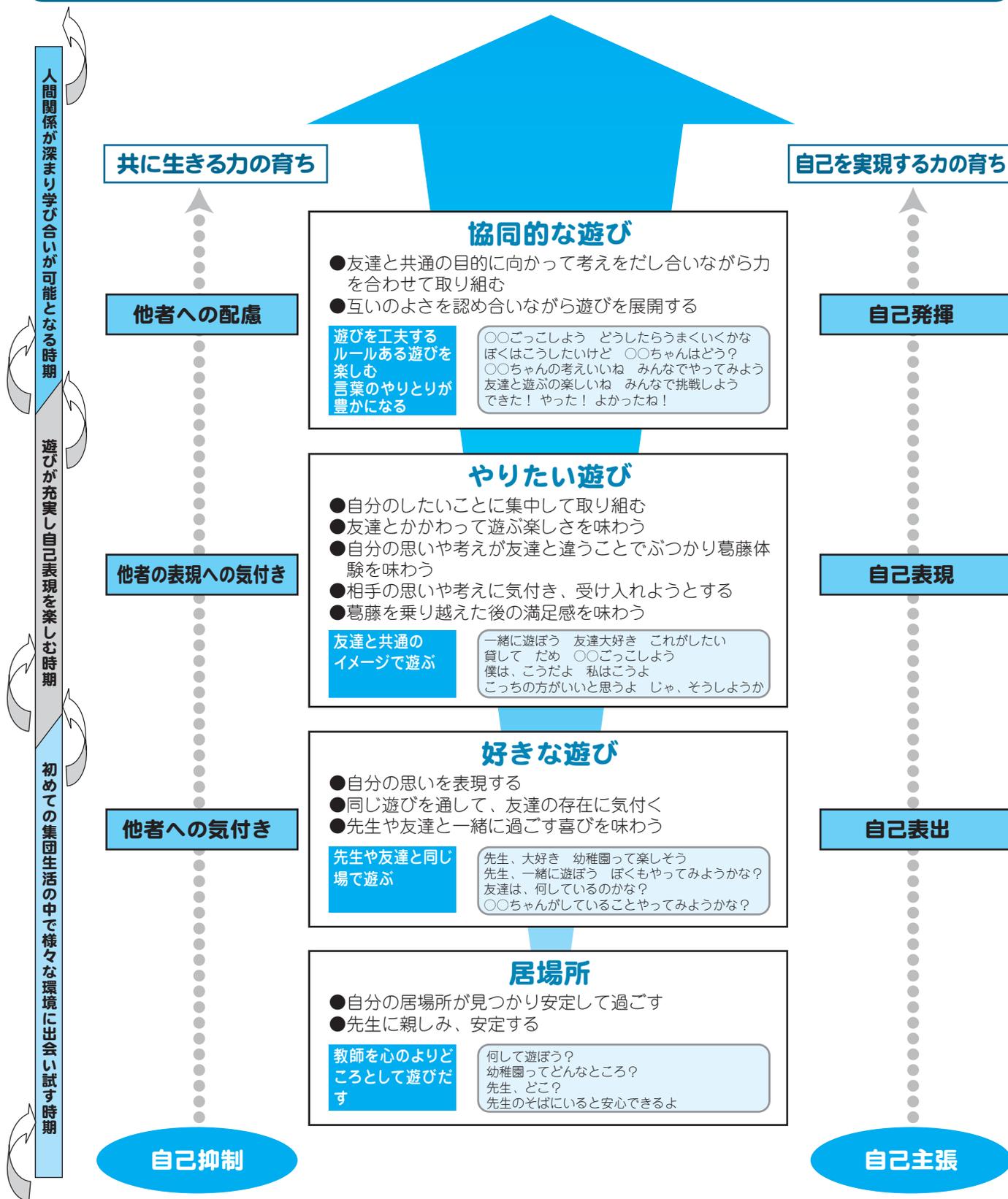
- 幼児が協同して遊ぶことを通して、①友達と目的やイメージを共有化し、②その具現化に向け試み、③繰り返し工夫して取り組み、④達成感や満足感を共有するという学びのプロセスを身に付けていきます。このような学びのプロセスを繰り返し経験していく中で、自ら考え行動する力、人と豊かにかわっていく力を身に付けていきます。

◆ 幼稚園において教師は、幼児にとって一番の理解者である

- 幼児が人とかわる力をはぐくむためには、そのプロセスを大切にすることから、教師は幼児と向き合い、幼児が時間をかけてゆっくりとその幼児なりの早さで心を解きほぐし、自分で自分を変えていく姿を温かく見守る姿勢が大切です。そのために教師は、「幼児の行動に温かい関心を寄せる」「幼児の心の動きに応答する」「ともに考える」等を心がけて援助していくことが大切です。

人とかわる力と協同する経験の関連性

発達に即して協同する経験がどのようなにはぐくまれるかを、以下のようにイメージ図で表しました。縦には「幼児の発達のプロセス」中央には「遊びの系統」両サイドには、幼児の自己主張、自己抑制が協同する経験を重ねる中でどのように変容していくかということを表しています。



- * 協同する経験を通して幼児が経験する自己主張（自分の考えや思いを出す）と自己抑制（自分の考えや思いを抑える）の相反する側面から幼児の内面を読み取り表しています。
- * 幼児の発達をとらえるプロセスは年齢区別を示しているのではなく、幼児の発達が行きつ戻りつしながら進んでいくことを踏まえ、螺旋的に見られるものとしてとらえ表しています。

視点からとらえた幼児の姿と協同性のほぐむ教師の援助の関連表

初めての集団生活の中で、様々な環境に出会い試す時期 (居場所・好きな遊び)

遊びが充実し、自己表現を楽しむ時期 (やりたい遊び)

人間関係が深まり、遊び合いが可能となる時期 (協同的な遊び)

視点	幼児の姿
A 遊びを工夫する力	<ul style="list-style-type: none"> ・友達のしていることに気付き、真似をして遊んだり、気の合う友達と誘い合っている遊んだりする。 ・いろいろな素材や用具に関心を持ち、友達と一緒に遊んで遊ぶ。 ・友達や先生の言葉に関心を示し、刺激を受けて遊びに取り入れる。 ・考えたことや発見したことや不思議に思ったことを伝え合う。 ・友達と一緒に試行錯誤しながら見たり遊んだり、ごっこ遊びを楽しんだりする。 ・他者の思いに気付き、調整したり譲ったりしながら、楽しく遊ぶ方法を考える。
B しルールを守って遊ぶ力	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単なルールが分かり、ゲーム遊びなどを先生や友達と一緒に楽しむ。 ・ルールを守って遊ぶことが楽しいと感じられるようになる。 ・先生や友達の言葉を受けたり考えたり、友達の気持ちに気が付いたりしながら、楽しく遊ぶ方法を考える。 ・簡単なルールを覚えていくことで、遊びが楽しめたり、盛り上がりたりする。 ・友達や自分の思いや考えがぶつかり葛藤する。 ・友達と遊びのイメージを共有し、共通の目的を見付ける。
C 言葉による伝え合いの力	<ul style="list-style-type: none"> ・考えたことや思ったことを言葉で話す。 ・友達や先生に自分の知っていることを教える。 ・自分の思いを相手に分かるように伝えようとしていたり、みんなの前で話そうとしていたりする。 ・友達や先生の話や内容を聞き取り、相手の気持ちに気が付いたりする。 ・先生や友達の言葉や考えを聞き取り、相手の気持ちに気が付いたりする。 ・先生や友達の言葉や考えを聞き取り、相手の気持ちに気が付いたりする。
幼児の思い	<p>「一緒に遊ぼう」「友達、大好き」「何がしたい」「賞して」「だめ」「ほくほ、こうだよ」「わたくしはこうよ」「こっちは方がいいと思うよ」「じゃ、そうしようか」</p>
環境の構成	<p>協同的な遊び 友達と一緒に遊んで、楽しいね</p>
教師の援助	<p>協同的な遊び 友達と一緒に遊んで、楽しいね</p>
環境の構成	<p>協同的な遊び 友達と一緒に遊んで、楽しいね</p>
教師の援助	<p>協同的な遊び 友達と一緒に遊んで、楽しいね</p>

幼児教育支援委員会委員

	所 属	職 名	氏 名
学 識 経 験 者	兵庫教育大学大学院	教 授	名須川 知 子 (委員長)
	神戸大学大学院	教 授	伊 藤 篤 (副委員長)
	梅花女子大学	准教授	小 川 圭 子
幼稚園関係者	神戸市立東灘のぞみ幼稚園 (兵庫県国公立幼稚園長会)	園 長 (会長)	澤 田 愛 子
研 究 協 力 園	西宮市立春風幼稚園	教 諭	河 崎 祥 子
	明石市立清水幼稚園	教 諭	松 原 潤 子
	西脇市立西脇幼稚園	教 諭	神 戸 みよ子
	相生市立平芝幼稚園	教 諭	室 井 千恵子
	篠山市立今田幼稚園	教 諭	谷 口 ひろ代
	豊岡市立出石幼稚園	教 諭	間 智 子

イラスト作成：西脇市立西脇幼稚園 吉田章子





指導の手引き

「人とのかかわりを豊かにする教育の推進」

－幼児が「協同する経験」を重ねるための教師の援助－

平成22（2010）年2月発行

編集発行 兵庫県教育委員会

21教T1-005A4

紙へリサイクル可